

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と関豊太郎教授と宮澤賢治(24)

東京及び関西方面への修学旅行

若尾 紀夫 (C昭39・院41)

賢治1年次の時に、恒例(注:学科毎に日程や行き先は異なる)の修学旅行(大正5年3月)が行なわれた。生徒達にとっては研修と観光を兼ねた一大行事であった。

農学科第1部(28名)と第2部(農芸化学科)(12名)の生徒一行は、農学科第1部の松井讓吉教授(養蚕・動物・昆虫:明治44年~大正12年)(写真1)の引率で東京及び関西方面へ出かけた。正式な旅行の日程は、大正5年3月19日(出発)から28日(解散)迄の10日間であるが、賢治達は解散後に3日間別行動をしているので13日間となる。生徒(記録担当者)が旅行中毎日の行動を書いた「農学科第二学年修学旅行記」が校友会報(1)に記載されている。

修学旅行の旅程

[生徒名]:記録担当者(10名)

[*生徒名]:農学科第1部の記録担当者(6名)

- ・19日晴(1日目)(出発)[*大谷良之]:農学科の生徒達(注1)、午後1時5分に盛岡駅発上京。
- ・20日晴(2日目)(東京附近)[*佐藤 農]:途中白河駅及び小山駅(鶴見要三郎が乗車)を経て、午前5時40分に上野着。西ヶ原農事試験場・高等蚕糸学校を見学。関東酸曾(株)は見学不可であった。
- ・21日晴(3日目)(駒場)[*長谷川 迪]:午前9



写真1 松井讓吉教授(養蚕学・昆虫学)

時に出発、農事試験場渋谷分場・東京帝国大学駒場農科大学・海事博物館を参観。その後上野の海の博覧会を見物し4時に宿に入る。

- ・22日小雨(4日目)(興津園芸試験場)[森本一男]:小雨、2日間在京後、8時40分に東京駅を出発、午後2時40分に滋賀県興津着、興津園芸試験場を見学。午後5時に興津を出発して京都に向かう。
- ・23日曇(5日目)(京都附近)[原 勝成]:午前4時9分に京都駅に到着。東西本願寺を訪問し桂橋際の万甚楼に午前6時到着する。小憩後、午前9時頃に府立農林学校及び府立農事試験場を見学。その後、竹林の筍栽培・嵐山・金閣寺などを見学し、北野神社を参拝。午後4時半頃に三条の西富家に宿泊する。
- ・24日晴天(6日目)(京都・奈良)[*菅原俊男]:朝9時に宿を出発。京都御所(紫宸殿)・二条離宮・桃山御陵を参拝し、農事試験場桃山分場を参観する。午後3時13分桃山駅から奈良に向い、県立農事試験場を見学。午後6時過ぎ対山館(東大寺転害門南附近)に投宿する。
- ・25日晴后雨(7日目)(奈良・大阪)[*森川修一郎]:午前10時まで奈良名所見学自由行動(注:賢治土産に鑄造の梵鐘を購入し、一個を高橋秀松に贈る)。東大寺・春日神社などを見学し10時頃全員揃って奈良を出発し大阪へ向かう。途中奈良県立農事試験場畿内支場を参観。その後、大阪に向かい途中大阪天王寺駅で降り参観予定の府立農学校が休校中のため孵卵所を見学。午後5時頃桃山駅発で京都の宿に帰る。
- ・26日晴無風(8日目)(大津行・石山三井2時参拝)[*三木敏朗]:午前8時宿を出て大津へ向かい山科を過ぎ大津に着く。石山町汽船に乗り石山寺・三井寺を参詣。滋賀県立農事試験場見学する。ここから2班に分かれ、一方は三保ヶ崎(大津)からインクライン南禅寺を見て6時に宿に帰る。他方は汽車で京都の宿へ戻る。その夜は茶和会を催し9時に閉会。

- ・27日（日曜日）（9日目）（京都見物）[塩井義郎]：当日は安息日で京都名所見物。午前9時宿を出発、三十三間堂・清水寺を参拝し、南禅寺附近の蔬菜の促成栽培を見学。その後は解散自由行動となり、夕食前に皆宿に戻り、9時頃には皆明日の別れを惜しみ眠りに就く。
- ・28日（月曜日）（10日目）（解散）[宮澤賢治]：この日で修学旅行は解散。賢治ら農学科第2部の12名一行は伊勢神宮に参拝し、二見ヶ浦の二見館に宿泊する。賢治の旅行記は下記に記載した。
- ・29日（11日目）：早朝、賢治達同志は二見ヶ浦で日の出を拝し、鳥羽から400噸の汽船に乗り伊勢湾を横切り三河蒲郡へ至り、そこから汽車で伊豆三島まで行く。
- ・30日（12日目）：三島宿からは徒歩で箱根八里（箱根旧街道）（2）を踏破、箱根火山や芦ノ湖を見学する。その後は箱根から小田原宿に下り、賢治は一行と別れ一人東京の京橋浅草へ戻る。
- ・31日（13日目）：賢治、花巻に戻る。

注1：農学科第1部（28名）と第2部（12名）全員が参加したとすると、総勢40名となる。但し実際に参加した第1部の生徒数については不明である。

賢治の修学旅行記

「3月28日・月曜日：賢治担当」

午前八時12名（注2）よりなる伊勢参宮の一団は



写真2 箱根火山模型（島津製作所製）
大正5年2月に関教授が教材用に購入
（農業教育資料館所蔵）

先生（注：松井讓吉教授）並に一同に厚く旅行中の御盡力を謝し、九時発の上り列車にて伊勢路に向つた。此の一行は人員も最も多く僕も亦此の一員なれば僕は此の行について書こう。見送りに来て呉れた一同と互いに健康を祝して汽車は勢よく京都駅を発した。草津を過ぎ逢坂の関を越え鈴鹿の突道を出でて後は伊勢独特の渺々たる菜種畑の真只中を一直線に南下するのである。伊勢米の産地たる安濃一志の大平野を過ぎて神郡に着いたのは午後三時である。山田市の市民は今や皇后陛下の行啓を迎ふべく混雑を極めて居る時であつた。先ず外宮に参拝し自動車にて直ちに内宮に向ふ。五十鈴川の清き流れに顔を洗い大樹森々たる御苑の中を縫うて進めば其の神々しさは言語に絶し神前に対する時自ら頭の下るを覚えた。日露戦役の記念品を見旧街道を見学して後二見ヶ浦に向ひ直ちに立石に行けば折りから名物の伊勢の夕風にて一波立たず油を流したる如き海上はるかに知多の半島はまぼろしの如くで其の風景の絶佳云はん方なしだ。一向二見館に宿り翌朝日の出を拝し静なる朝風を利用して汽船にて三河国蒲郡に着し直ちに東京に向つた。（完）

以上のように農学科生徒一行は「東京—興津—京都—奈良—大阪—京都」の旅程で各地の農事試験場・園芸試験場・農学校などを訪問（修学旅行）。最終日に京都で解散、自由行動となる。農学科第2部12名（注2）は伊勢「伊勢—鳥羽」に行き、伊勢神宮を参拝する。この地では伊勢出身の塩井義郎が案内をかって出たであろう。その後、賢治達同志は「蒲郡—三島—箱根—各自の目的地（賢治は東京・花巻）」の旅程で箱根越えの旅を続ける。箱根行に誰が同行したか記録がないが、塩井義郎（第2部）・高橋秀松（第1部）・大谷良之（第1部）は参加したと思われる。

注2：伊勢までは農学科第1部の生徒も参加したと思われるが、具体的な記録は残っていない。

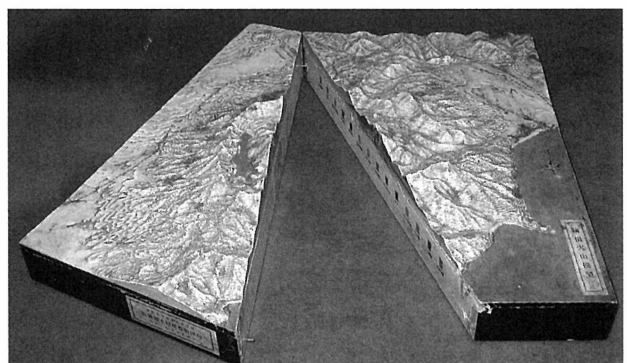


写真3 箱根火山模型（写真1）を開いた状態

賢治が詠った短歌

賢治はこの修学旅行中に20首の短歌（大正5年3月より：歌稿256～275）（3）を詠っている。

[京都・御所]

- ・日はめぐり 幡はかがやき 紫宸殿たちばなの木ぞたわにみのれり (256)

[京都・山科]

- ・山しなの たけのこばたけのうすれ日に そらわらひする 商人のむれ (257)

[奈良・対山館・奈良公園]

奈良では対山館に泊まり、鹿で有名な奈良公園に立ち寄る。

- ・たそがれの 奈良の宿屋ののきちかく せまりきたれる銀鼠ぞら (258)
- ・にげ帰る 鹿のまなこの燐光と なかばは黒き五日の月と (259)

[鳥羽・渥美半島・蒲郡]

- ・そらはれてくらはげはうかび わが船の渥美をさしてうれひ行くかな (261)

[鳥羽・知多半島・蒲郡]

- ・明滅の 海のきらめき しろき夢 知多のみさきを船はめぐりて (262)

[箱根・箱根旧街道・箱根の山]

賢治にとって箱根は地質学的に魅力的なところであった。関教授は火山模型（富士地理・阿蘇火山・箱根火山の模型を大正5年2月に購入：農業教育資料館で展示）（写真2,3）などの教材を使った「鉱物及地質」「土壌学」の講義をしていたので、受講した賢治は箱根の火山について興味を持っていた。三島から箱根旧街道（注3）を登り火山岩や鉱物などを観察し短歌を残している。

- ・輝石たち こゝろせはしく別れをば 言ひかはすらん函根のうすひ (268)
- ・わかれたる 鉱物たちのなげくらめ はこねの山のうすれ日にして (269)
- ・ひはいろの 重きやまやまうちならび はこねのひるの うれひをめぐる (270)
- ・うすびかる 春のうれひを ひはいろの笹山ならぶ函根やまかな (271)

[箱根・芦ノ湖]

- ・風わたり しらむうれひのみづうみを めぐりて重きひはいろのやま (272)

[東京・京橋・浅草]

一行と別れた賢治は一人東京に戻り京橋・浅草へ行く。

- ・しろきそら この東京のひとつむれに まじりてひとり 京橋に行く (274)
- ・浅草の 木馬に乗りて 晒ひつゝ 夜汽車を待てどこゝろまぎれず (275)

注3：箱根旧街道は箱根越えの石畳道で「箱根八里」と言われる。通常登りは、小田原宿を出発し箱根湯本で早川にかかる三枚橋を渡る。この橋が箱根旧街道の東の基点で、早雲寺・湯本茶屋・畑宿・榎木坂・猿滑坂・甘酒茶屋・権現坂を歩き屏風山の峠を越え、芦ノ湖畔の元箱根に到着する。降りには、箱根関所を通り箱根宿・箱根峠・山中宿を経て三島宿に至る。このように東ルートは、小田原宿から芦ノ湖畔（登り4里）・芦ノ湖畔から三島宿（降り4里）であるが、賢治達は三島宿から逆（西）ルートで箱根を越えた（2）。

二見ヶ浦の岩石標本

賢治達は二見ヶ浦に行き、伊勢の夕凧や遠くに見える知多半島などの風景を楽しみ二見館に宿泊した。二見ヶ浦では、賢治は恐らく幾つかの岩石を採集したと思われるが、その中の一つである岩石標本「緑泥片岩」（注4）（写真4）が残されている（4）。

注4：緑泥片岩（Chlorite schist）：変成岩で、玄武岩質火山岩が変成作用を受けて生成する。緑泥石や緑簾石を主成分とし方解石・黄鉄鉱・磁鉄鉱・チタン鉄鉱などを伴い、塊状～葉片状で淡緑色～暗緑色である（6）。

高橋秀松宛て葉書

賢治は大正5年3月31日に花巻に戻り、4日後（4月4日）に親友高橋秀松に手紙 [15]（5）を書いている。4月7日からは第1学期の授業が始まるので、賢治は休む間もなく盛岡に戻った。



写真4 賢治が二見ヶ浦で採集した緑泥片岩「伊勢二見」と賢治自筆のラベル

高橋秀松宛て葉書（大正5年4月4日）

宮城県名取郡増田町 岩手 宮沢賢治 拝

「旅行中はいろいろと御世話になりまして何とも有り難うございます。この旅行の終り頃のたよりなさを淋しさと云ったら仕方ありませんでした。富士川を越えるときも又黎明の阿武隈の高原にもどんなに一心に観音を念じてもすこしの心のゆるみより得られません。聖道門の修業者には私は余りに弱いのです。東京のそれも白く仙台のそれも白くなつかしいアンモナイト介や月長石(注5)やの中にあつたし胸は踊らず旅疲れに鋭くなった神経には何を見てもはたはたとゆらめいて涙ぐれました。そんなとき丁度汽車があなたの増田町を通るとき島津大等先生がひょっとうしろの客車から歩いて来られました。仙台の駐車場で私は三時間半分睡り又半分泣いておりました。宅へ帰つてやうやく雪のひかりに平常になつたやうです。昨日大等さんのところへ行つて来ました。」

親友に宛てたこの手紙は、修学旅行から帰ってきた直後の賢治の心境を率直に表している。

「修学旅行はかなり強行であったが、賢治にとり充実したものであった。同志と箱根を踏査し小田原宿から東海道線で富士川を渡り東京に行き、更に東北線で夜明けの阿武隈高原を走り仙台駅で少時仮眠して花巻の自宅に戻った。賢治は、この旅行が終わる頃になると段々たよりなく淋しい気持ちで一杯に

なっていくという。東京も仙台も空はどんよりと白く、アンモナイト化石や月長石の中にいるようであったという。短期間に級友達と多くのことを見聞いたことや旅の疲れで神経が高ぶり、何を見ても空しく悲しい気持ちになり自然と涙が溢れでた。しばらくは饗宴の後のような空虚な心であったが、故郷の家に戻り雪のひかりを見てやっといつもの心に戻ってきた。」

注5：アンモナイト介(写真5)と月長石(ムーンストーン)：両者には多様な模様や色彩のものがある。ここでは賢治は「どんよりとした白い空」「心はれない様子」を乳白色のアンモナイト化石と月長石(ガラス質や遊色のものも存在)を用いて表現している。賢治が鉱物や岩石の特徴に精通していることがうかがえる。

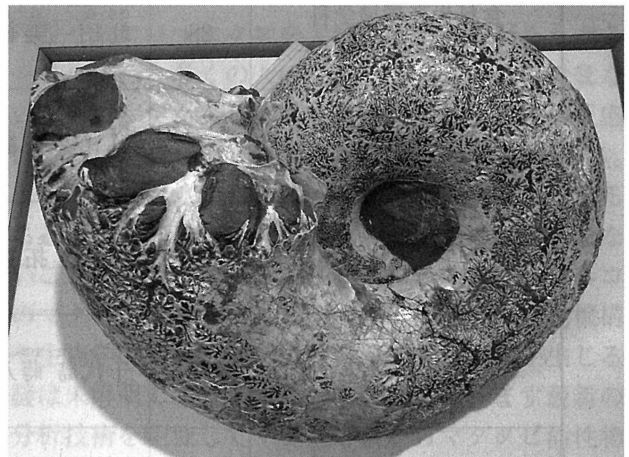


写真5 アンモナイト化石(岩手大学ミュージアム所蔵)
産地：岩手県野田村米田浜
地質年代：中世代白亜紀後期(8,300~8,700万年前)

参考資料

- 1) 農学科第二学年修学旅行記：校友会報 第31号、7-18 (大正5年7月)
- 2) 宮沢賢治の生涯：宮城一男、筑摩書房、26-29 (昭和55年11月)
- 3) 宮沢賢治全集3：宮沢賢治、ちくま文庫、80-84 (昭和61年6月)
- 4) 石っこ賢さんと盛岡高等農林一偉大な風景画家 宮沢賢治一：井上克弘、地方公論社、3-10 (平成4年5月)
- 5) 宮沢賢治全集9：宮沢賢治、ちくま文庫、32-33 (平成7年3月)
- 6) 検索入門 鉱物・岩石：豊 遥秋・青木正博、保育社、146 (平成8年2月)